

三、人間の現実の姿

女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。(創世記三章六節～七節)

さあ、三章は、「人間の現実の姿」を示しています。二章のお話も三章のお話もシュメールの神話が土台となって作られている、とされています。人間とは何であるか、ということを実に的確に伝えた話であって、人類の先祖の話ではありません。人類の先祖についての追求は、科学にまかせておけばよいのです。

まず、蛇にだまされて、二人が「善悪の知識」の木から取って食べることになります。いかに、お話とはいえ、男性の一員である私からすると、女にすすめられた男が、なんの抵抗もなしに食べたことは不満です。同じ食べるにしても、もう少し抵抗して欲しかった。

「おい、まずいよ。神さまから命令されているんだぞ。ほんとうに、いいのか」「あなたは、私と神さまとどっちを愛しているの?」と女に泣き付かれて、その気になって、

「分かったよ。おれも食べればいいんだろ? 食べますよ、ええ、食べますよ」とかなんとか言って食べて欲しかったのに、と思うのですが、これは私の勝手な願望に過ぎません。

とにかく、この物語をもう少しよく読んでみましょう。

①判断のミス

二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。(七節)

ボタンのかけ違いが始まります。「目は開け」とは、判断力がついたことを示します。しかし、裸であることが醜いことだと判断してしまうのです。命令に従っていた間は、裸であるのに、恥ずかしがりしなかったのに。性器のことを「恥部」と呼ぶのもよく考えるとおかしいことですね。「恥部」として隠さねばならないとしたことが、かえって性欲を刺激して「淫乱」を生み出しているのかも知れません。しかし、何千年もこういう習慣で来てしまいましたから、今更、ヌーディスト村に変えようとしても無理でしょう。自然界では、性器を恥部とはしていませんね。判断のミスは、何かに捉われている時に起こります。恐怖に捉われていると、ランタンの灯が、火の玉に見えたりします。急いでいる時にも大切なものを見落としたりします。判断のミスをしてはならない、というのではなくて、一旦してしまった判断に捉われてしまうのが問題なのです。思い込み、先入観、無知などが、判断を誤らせます。自分のした判断に、待ったをかけることができるか、どうかという心の余裕を持っていることが正確な判断に到る道でもあります。

②神を避ける

その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れると（八節）

信仰などに頼りたくはない、とか、信仰を持たないでいることが、ほんとうに自由だと思われています。人間は潜在的に神の顔を避けたいという欲求を持っているのでしょうか？「神の顔を避ける」ということは、真実から目をそむける結果をもたらします。どうしてもツツパらざるを得なくなるからです。時として、ツツパることも必要でしょうが、多くの大事なチャンスには、よく「肩の力を抜け」と言われます。集中力は、何かから逃げていては起こらないものです。

③会話のズレ

主なる神はアダムを呼ばれた。

「どこにいるのか。」

彼は答えた。

「あなたの足音が聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから。」（九節～一〇節）

見ただけで、会話のズレが分かりますね。アダムの返事は、神様が聞こうとしておられたこととは全く別な言い訳でした。最近は、親子の会話とか、夫婦の会話がないとよく言われますが、問題の本質は、会話がズレているから、会話が無くなったのだと思います。話してもムダだと思えば、誰も話そうとはしなくなります。

会話は、相手の気持ちを汲み取ることで成立します。それを一方的に言いたいことだけを言う、というのでは、会話が成り立つはずがありません。私は、幼稚園のお母さんたちによく問い掛けます。

「背中でものを言っていないですか？」

台所の流しに向かったまま、子どもにいきなり命令します。

「〇〇ちゃん、ちょっとお使いに行って！」

返事がないので、ふりかえって見ると、ファミコン・ゲームに夢中です。それを見ると、

「お母さんが呼んでるでしょう。どうして返事しないの！いい加減にきなさい！そんなことをいつまでもやっていたら目を悪くするんだから！」

これでは、子どもが言うことを聞こうとしないのも当たり前だと思いませんか？子どもの心に傷を与えただけです。子どもが言うことを聞かないと嘆く前に、子どもが親の暴言でどれだけ傷ついているかに気づいて欲しいと思います。子どもは、よく耐えているのですよ。

子どもにお使いを頼むのであれば、こちらの手を止めて、まず、よく見る。ファミコンに夢中だったら、そばに行って、

「すごい！おもしろそうね。もう少しだね。それが終わったら、ちょっとお使いに行ってくれな

い？」

たとえば、子どもは傷つきません。やはり子どもにも一人前の人格がある、ということを認めなければいけないと思います。

④責任転嫁

神は言われた。

「お前が裸であることを誰が告げたのか。取って食べるなど命じた木から食べたのか。」

アダムは答えた。

「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました。」

主なる神は女に向かって言われた。

「何ということをしたのか。」

女は答えた。

「蛇がだましたので、食べてしまいました。」(一一節～一三節)

見事な責任転嫁ですね。いかにも神様が悪いと言わんばかりです。自分だけが悪いとは認めたくないのです。

昔、札幌にいた頃、駐車違反でステッカーを貼られました。警察署に出頭する途中、私が停めていた場所に別の車が入っているのを見ました。私は悔しかったのでお巡りさんに言いました。

「同じところに別の車が停まっているんですが、あれ、駐車違反じゃないんですか？」

すると、若いお巡りさんでしたが、こう言いました。

「あんた、違反してなければ、それを言いな。」

これには、ギャフンでした。人間、なかなか自分の罪を認めたくないものなのですね。あっさり「ごめんなさい」と言えば済むものを、責任転嫁するので余計ややこしくしてしまうことは、よくあるのではないのでしょうか？

⑤性差別

神は女に向かって言われた。

「お前のはらみの苦しみを大きなものにする。

お前は、苦しんで子を産む。

お前は男を求め

彼はお前を支配する。」(一六節)

最近、ようやく性差別が大きく問題にされるようになりました。ここは、命令にそむいた罰が示されています。罰として、女には、出産の苦しみと男に支配される、つまり性差別が挙げられています。二章は、先程も宣べましたように、「あるべき人間の姿」が示され、三章は、「人間の現実の姿」が示されていると、私には思えるのです。

この性差別も、「善悪の知識」から生まれています。女性は、本来、何もかも男性に劣っている、と大真面目で論じられた時期がありました。女性は弱い存在だから、男性が守ってあげなければいけない、というのだって、性差別ではありませんか？二章一八節に、こう書いてあります。

主なる神は言われた。

「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」

前にも紹介しました左近淑先生は、このところについて、次のように述べておられます。

「ふさわしい助け手（前の口語訳では、こう訳されていました）とは、人が土地を「耕す」（二章五節）時の「手助け」ではない。……男が生きてゆくために利用する＜手段、道具＞を意味するのでもない。ふさわしい伴侶とは、二人が相対して立つ関係にあることを言う。二人が相対応する関係は、すぐれて、＜人格的＞な関係である。決して主従の関係ではない。それは男の支配の対象ではなく、一方が他方に手段となる関係ではない

聖書はここでひとりの男性とひとりの女性、夫と妻との人格的關係を明らかにしている。それだけではない。人間はこの『ふさわしい伴侶』を必要とするように、本来つくられている、ということも明らかにしている。ふさわしい伴侶をもつことは人間存在の本質に属する、といわれるのはこの意味である。人間は交わりに向けてつくられた、といわれるのはこの意味である。」（左近淑「時を生きる」、日本基督教団出版局、一九八六年五月一〇日、初版、三八頁）

二章では、男性と女性が主従関係ではない、と述べているのに、三章になると、男性が女性を支配すると述べているのは、建前と現実の違いを述べている、といってもいいのではないのでしょうか。

⑥労働の虚しさ

神はアダムに向かって言われた。

「お前は女の声に従い、

取って食べるなと命じた木から食べた。

お前のゆえに、土は呪われるものとなった。

お前は、生涯食べ物を得ようと苦しむ。

お前に対して

土は茨とあざみを生えいさせろ 野の草を食べようとするお前に。

お前は顔に汗してパンを得る 土に返るときまで。

お前がそこから取られた土に。

塵にすぎないお前は塵に返る。」（一七節～一九節）

ここは、農耕民族としての男性についての罰として述べられていますが、広い意味で、「労働の虚しさ」と言ってもよいと思います。これも「善悪の知識」の結果なのです。なるだけ楽をしてお金を得ようと誰でも考えます。どういう労働が、いいか悪いか、とまさに現在の人々が三K（きつい、きたない、気持ち悪い？）の仕事を避けたがる姿そのものです。職業に貴賤はない、と

言われるのに、現実には、人々は職業にランクをつけたがります。

また、すべてをお金に換算するゆえに、起こる悲劇もあります。自然と共存してきた先住民族を滅ぼしたのは、経済的な「先進諸国」でした。そして、地球環境破壊が進んで、地球破滅も遠い未来のことではないと思われるほどになったのも、強いことはいいことだ、と強さを求めて、土地や自然をただ利用してきた人類が自ら掘った墓穴だったのです。

このように見てくると、創世記の人間観が実にシャープで奥深いことがお分かりいただける、と思います。今から約三千年も前に書かれたものとは到底思えないですね。聖書は、「神のことば」と言われますが、それは同時に「人間宣言の書」とも言ってよい内容が秘められています。そして、醜い、自己中心的な人間のさまざまな営みをじっと慈しみの目で見守ってくださる神の目を感じます。それが旧約のすばらしいところだと私は思っているのです。